

読売新聞投書欄目録稿 (明治16年)

宗 像 和 重

A List of correspondence columns of The
Yomiuri Shinbun (1883)

Kazushige Munakata

本稿は、明治前期の「読売新聞」投書欄研究の一環として、本誌前号（第28号、1990年12月）に掲載した「読売新聞投書欄目録稿（明治14—15年）」に続くものである。前号に従って、いくつか凡例的なことを確認しておけば、まず本稿の主たる対象である投書欄（当時の名称は「寄書」欄）の採録にあたっては、冒頭に「寄書」と記し、続いて表題、住所、筆名の順で記載した。このうち無題の投書については、その冒頭部をく >で抜き出し、同日に二編以上掲載されている場合には／で区切った。なお、年頭に「配り初めの附録」とあるのは、社員や常連寄稿家の新年祝詞を中心とした、四頁の別刷り付録のことである。

ところで、明治10年代中ごろの「寄書」欄が、「近代文学勃興に先立つ過渡期の文壇、あるいは新進作家の訓練場」として「空前のにぎわいを呈していた」（『読売新聞百年史』）ことは、前号で触れた通りである。そうした傾向は、16年に入っても基本的には変わっていないが、ただ、「己れ十一二の頃よりこの読売新聞を好み、喜んでその投書を読けるに、よく人情を説き義理を弁じ、且身を立て家を起す道をしも懇ろに諭されたれば殆ど良師友を得たるの思ひありき、而して此新聞はますます栄え行けるに、ふみ寄する人の変り変りて今に至つては殆ど一変せるが如し」という投書（青山南二 東今一「旧投書家に告ぐ」、3月6日）が語るように、この前後から投書家の世代交代の動きが目立ってくることに、注意しておきたい。とりわけ、前年の高島屋塘雨（野田千秋）に続き、長老格の投書家中坂まとき（中川真節）が12月に死去したことは、「嗚呼去歳の八月は高島屋塘雨大人に訣れ今亦まとき大人にわかる晴雪子の齡遙に君の下に在れば恰も前には親を亡ひ今亦兄にわかれたるが如し」（可愛楼晴雪「中坂まとき君を悼む」、12月25日）というような寂寥感とともに、時代の推移

を強く印象づけることになったのである。

そして、こうした世代交代の動きに伴って、同じく常連投書家であった南新二が「近頃は投書が余程むづかしくなつて拙などの文盲にはチトお歯がたちかねる一件となつて来たゆえ」（3月29日）と語るように、寄書の内容にも変化が現れつつあったことを、指摘しておくべきであろう。すなわち、さきほどの東今一の言葉をかりれば、「よく人情を説き義理を弁じ、且身を立て家を起す道をしも懇ごろに諭された」といった、日常生活の心得や教訓をわかりやすく、また滑稽めかして教え諭す類の投書は次第に影をひそめ、随想や考証、批評的な文章が目立ち始めることになる。特に文芸関係では、前年に刊行された外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎らの『新体詩抄』（明治15年8月初編、12月第二編）に触発されたとおぼしい犬山居士「夏夜見蝶有感新体詩一首」（7月26日）や、7月に結成された「かなのくわい」をめぐる話題、さらに政治小説・翻訳小説の隆盛を背景とした可愛楼晴雪「小説本を読むの得失」（5月31日～6月13日）、拈華微笑庵「翻訳家先生に要請す」（10月14日）、枕水漁史「稗史小説の害」（11月7日）など、「改良」の時代における近代文学の胎動が色濃く反映されてくるのである。こうしたなかで、数え歳16歳であった樵耕亭蛙船こと山田美妙が、翻訳「もぎ木のはなし」（11月29日・12月11日）で登場することになるのだが、前号でも触れたように、これらの内容にかかわる検討や意味づけについては、投書欄の全体像を見極めたくて、別稿を用意することにしたい。

これら投書欄に加えて、後の社説にあたる第1面の「読売雑譚」欄を〔雑譚〕として採録した。明治16年もこの欄は不定期で、澤上漁史成島柳北らが筆をとっているが、4月に改正新聞紙条例が制定され、言論取締りが格段に強化されたことに対する批判と危機感を、銀西野夫「獄裡の旧夢」（2月2日）、同じく「讒謗は己に利ならず」（4月19日）、澤上漁史「新聞各紙のために賀す」（6月21日）などからうかがうことができる。さらに、〔寄書〕〔雑譚〕のほか、別刷りの「附録」から採録した署名記事があり、これを含めて、明治16年の署名記事はすべて採録したことになる。

なお、休刊日の月曜や年末年始の休刊のほか、刊行日でも〔寄書〕〔雑譚〕が不掲載の日もあるが、それらについてはいちいち断らず、日付を略した（念のため、日付につづいて曜日を記してある）。また、編者による注記を*で記したほか、当時の状況を把握する手掛かりとして、『読売新聞百年史』年表の記事を該当日の最後に→で付け加えた。採録を明治16年（1883）に限ったのは、専ら紙数の都合によるものであり、本稿は、誤植と疑われるものも含めて、ほぼ紙面掲載の形のまま採録することを旨とした未定稿であることを、お断りしたい。

明治16年（1883）1月

4木〔寄書〕祝詞 青山南二 東今一／貴社新聞の初ずりを祝してく＊一句＞ 本郷 芳真庵梅道

〔配り初めの附録〕絵画共進会第一区の筆意にならひて年のはじめに懷を述ぶ 饗庭篁村／義家朝臣の勿来の関に駒を止めたる所く＊一首＞ 鈴木重嶺／静のかたにく＊一首＞ 久米幹文／源義光時秋に笙の秘曲を伝ふる所く＊一首＞ 寛正庸／仏の前嵯峨の庵にとひきたる図く＊一首＞ 佐々木弘綱／夕顔の君扇に花をのせて門を出たる所く＊一首＞ 小杉樞郎／宮姫のかつぎ着てゆくかたく＊一首＞ 小中村清矩／第二区狩野派のつらね南新二述／三福笑 東喜坊／第三区に倣ふて 中坂まとき／北宗派 可愛楼晴雪／第四区に倣ふて 下谷坂本 若丸／＜＊各一句＞ 梅老・梧園・杏雨／新年の祝詞 横浜 寛指堂しせん／同く第五区に倣ふて 苔の屋一心稿／＜＊各一首＞ 岩上亭・多麻園・梧園ひさ子・千松亭琴馬・千枝・真垣・海辺蟬人・千種庵・蟹の舎・額翁・千琴亭緒依・笹麻呂・萩園秋染／新年く＊二首＞ 武州日野 絵馬屋／書初 額翁社中 立斎広重／＜＊各一首＞ 野本池住・松本芳延・佐野るゐ子・琴通舎／第六区に倣ふて 向島 机友処士／元禄より天保の頃までとしの始めに化粧文とてちまたを売りありきけるも後々はその事絶たり今その旧文に拠りて新年の祝文にかゆる 班文子／新年 金井安善／初摺の祝詞 下総八日市 小松／＜改進の年を迎へ＞ 前島和橋 ＊この新年附録の「絵画共進会第一区の筆意にならひて」以下は、前年10月1日より11月20日まで、上野公園において開催された第1回内国絵画共進会の構成に見立てたもの

6土〔寄書〕＜夢ばかりなる手枕とか＞ 中坂 まときしるす

7日〔寄書〕＜世の移り行くことの早さ＞ 四ツ谷愚老 門脇五連

9火〔寄書〕投書はじめ 可愛楼晴雪／四海清く＊一首＞ 並河 松翁 ＊「四海清」は新年の勅題

10水〔雑譚〕新年の述懐 遷上漁史 〔寄書〕きうへいの説 蓬風道人

11木〔寄書〕初夢記 向島 机友処士 →青柳助五郎仮編集長、重禁固2か月、罰金7円50銭に処される

12金〔寄書〕羞の書初め 在崎陽 初音谷 →小林金太郎を仮編集長とする

13土〔寄書〕他禪角舩 神田 鼎山居士／持込郵税の廃止 拈華微笑庵

14日〔寄書〕シリの説 青山南二 東今一

16火〔寄書〕昇等年間を祝す 可愛楼晴雪

17水〔寄書〕古老の物語を聞く 蓬風道人

18木〔雑譚〕陸海軍の拡張 加藤瓢乎稿 〔寄書〕空の夜あかし 青山南二 東今一 →紙面窮屈のためポンチ「博笑戯墨」欄を廃止 ＊「博笑戯墨（たはれごと）」欄は前年6月1日に創設

19金〔寄書〕河豚の毒 磬城角田玉川葉鋪小僧／梅信問答 其名は由縁の安芸の 梅坪

20土〔寄書〕＜此世智辛い世の中に＞ 外神田 かなゐ安善／阿房陀羅法談 拈華微笑庵

21日〔寄書〕売薬に非ず 赤坂赤猿／写真石版の得失 竹の舎主人

23火〔寄書〕四海清く＊各一首＞ 坂本額翁・鈴木安久染・佐野秋吉・高階巖美・三木源次郎・

宗 像 和 重

小本愛竹・小林琴高・筑前冠 藤田義寛・杉山八洲楽

24水〔寄書〕愛国者は酒と煙草を飲むべきか 可愛楼晴雪

25木〔寄書〕への説 青山南二 東今一／怖いはなし 東喜坊

26金〔雜譚〕療養の分疏 澤上漁史 〔寄書〕紙鳶の憾 御門次郎／阿房陀羅法談（前の続）

拈華微笑庵 →成島柳北、雜譚に「療養の分疏」を掲げ、28日熱海に出発、以後同地から原稿送る

27土〔寄書〕赤猿先生に謝す 青山南二理髮小僧 東今一／先手を取れ 中坂まとき

28日〔寄書〕＜四海清の御歌題にて＞ 五連老爺門脇湿良／風説の実行を望む 可愛楼晴雪

31水〔寄書〕電気燈の説 青山南二 東今一／阿房陀羅法談（前の続） 拈華微笑庵

明治16年（1883）2月

1木〔寄書〕二世高島屋君の投書を促す 下総八日市場小松述／風説の実行を望む（続稿） 可愛楼晴雪

2金〔雜譚〕獄裡の旧夢 銀西野夫 〔寄書〕雪隠の記 大倉鑑三郎／腹虫の店立 東喜坊 → 加藤瓢乎、雜譚に「獄裡の旧夢」を掲げ、往年を追憶するとともに、「本年の刑法は昨年の刑法にして、処断は昨年の処断にあらず」と新聞条例の運用を批判 *加藤瓢乎は前年2月に誹毀罪で重禁固15日、罰金5円に処され、当時の雜譚欄に「出獄の記」（明治15年2月19日）がある

3土〔寄書〕寝言のあまり一 青山南二 東今一

4日〔寄書〕＜聖旨に基きて本年度よりは＞ 中坂まとき生／雪隠の記（前号の続き）

6火〔雜譚〕今昔の感 澤上漁史 〔寄書〕＜熱海の富士とか筑波とかいふ＞ 梧園主人／雪日漫録 可愛楼晴雪

7水〔寄書〕雪隠の辞 青山南二 東今一

8木〔寄書〕鼠が引出すかみのほうご 亀戸 立命野夫稿／小松君に告ぐ 可愛楼主人

9金〔寄書〕寝言のあまり第二 青山南二 東今一／風説の実行を望む（続稿） 可愛楼晴雪

10土〔寄書〕出来ない相談 苔園一心／雪達摩説 柴江春戯草

13火〔寄書〕＜昔の人はよくいへば正直＞ 根岸里鈍我／雪達摩（前号の続） 柴江春戯草

14水〔寄書〕たしかなる話 拈華微笑庵／人はかくこその一 下谷 紙鳶絵師

15木〔寄書〕鼠が引出すかみのほうご前号の続 立命野史

16金〔寄書〕寝言のあまり第三 青山南二 東今一／人はかくこそ二 下谷 紙鳶絵師

17土〔寄書〕雪日漫録二 可愛楼晴雪／不潔 向島 机友居士

18日〔雜譚〕蛭子鯛 澤上漁史 〔寄書〕絵画漫言 拈華微笑庵

20火〔寄書〕＜此頃浅井氏の北堂が＞ 外神田 かな井安善

21水〔寄書〕寝言のあまり第四 青山南二 東今一／因果物語 向島 机友居士

22木〔寄書〕怒りを移すの非 中坂まとき／因果物語（つゞき） 向島 机友居士

23金〔寄書〕砂糖論 苔園逸心／雪日漫録 青山南二 東今一

24土〔寄書〕当時流行会尽 京橋市隠 菜買米人／＜唐土のお正月と諸共に＞ 四谷の 門脇五連

25日〔寄書〕夢に版木を見る 青山南二 東今一／長夜感懷 晴雪迂夫

読売新聞投書欄目録稿（明治16年）

27火〔寄書〕人は斯社の三 下谷 紙鳶絵師／因果物語（廿二日のつき） 机友処士

28水〔寄書〕飲酒を誡む 神田萬 金子心鋭／君臣有義 大倉呈三郎

明治16年（1883）3月

1木〔寄書〕謝辞 机友処士

2金〔寄書〕水産博覧会く*二首> 班文子／東海道初旅の心得 来々堂

3土〔寄書〕きつねのはなし 青山南二 東今一／一目先きへ置いてかゝれ 横はま しせん誌

4日〔寄書〕婦人の分を論ず 本郷森川町 佐藤俊

6火〔雑譚〕春めかぬ春 澤上漁史 〔寄書〕旧投書家諸君に告ぐ 青山南二 東今一／焼芋を喰て感あり 本郷丸山 醒軒処士

7水〔寄書〕<頃日の雨続きに気鬱々として> 礫川 可月生／後悔の説 柴江春戯草

8木〔寄書〕新調柳多留 和胸散人寄送く*仁志喜・義母子・鉞り・和合・天銀・錦多楼・満治楼・文多・六石・楓川居・風柳・穂垂・都楽・家内・実子・素仙・夜梅・和印・五連・六石・吞七・松花・木然人・莊丸・立舛・九雅・助的・雅交の狂句各一句を採録>/三たび貴社貴記者に呈す 青山南二 東今一

9金〔寄書〕後生可畏の説 中坂まとき／胃病患者に告ぐ 赤坂 伊東誠之

10土〔寄書〕穴の得失 生坂鍋子／あなづくし 青山南二 東今一

11日〔雑譚〕蓄財の要訣 饗庭篁村 〔寄書〕胃病患者に告（前号の続） 赤坂 伊東誠之

13火〔雑譚〕蓄財の要訣（前号の続き） 饗庭篁村 〔寄書〕主人たる者に望む 在崎陽 初音 谷稿／風流早学問 苔の屋一心稿

14水〔雑譚〕蓄財要訣（前号の続き） 饗庭篁村 〔寄書〕<此頃一方乾ける路を> 四谷の豪傑門脇五連／読売新聞寄書欄内生坂鍋子東今一両君のあなの言葉をよみてく*一首> 源不美乎

15木〔雑譚〕蓄財要訣（前号の続き） 饗庭篁村 〔寄書〕不取締の損害 可愛楼晴雪／栄枯無定 青山南二 東今一

16金〔寄書〕触られて感あり 鍋子／墨陀の梅を見る 横はまの しせん

17土〔寄書〕<劇場の千秋楽には> 入谷村 好劇閑人／<貴社新聞雑譚欄内に> 青山南二 鶴の屋一声

18日〔雑譚〕食体 澤上漁史 〔寄書〕不取締の損害（続稿） 可愛楼晴雪／箸の詞 青山南二 東今一

20火〔寄書〕<浄瑠璃を聞て感有と云を> 外神田 かな井安善 →この日から題字横に「駅通局認可」と掲げる

22木〔寄書〕党派の分析 横はまの しせん／<何くの何人かは知らず> 中坂 まとき

23金〔寄書〕<花は桜に人は武士> 拈華微笑庵／家園独語 可愛楼晴雪漫筆

24土〔寄書〕<春もやゝけしきとゝのふ月と梅> 中坂 まとき漫筆／寝言のあまり第五 青山南二 東今一

25日〔寄書〕余感 本多増次郎／<昔し源の牛若丸> 生のや鍋子

27火〔寄書〕鵜呑は消化れず とみた夏暁／みやびなき花盗人 琴通舎稿 →青柳助五郎、重禁固を終わり石川島監獄から帰社

宗 像 和 重

- 28水〔寄書〕不取締の欠を補う 可愛楼晴雪／人とランプは違ひやう 東喜坊
 29木〔寄書〕月の弓張紙の由来 南新二／悪まれ口 拈華微笑庵
 30金〔雜譚〕人間万事酒屋の女房 寢庭篁郎 〔寄書〕棄旧弊去佞人説 中坂 まとき生／交際
 の状況 可愛楼晴雪 →題字を池原香釋（日南）筆に改める
 31土〔寄書〕鼻の説 生のや鍋子／写真に幽霊の出し由来 牛門外 本松齋一甫

明治16年（1883）4月

- 1日〔寄書〕不可知足 向島 机友処士／当世人情噺第一 在崎陽 初音谷稿
 4水〔雜譚〕生稗別有り 湊上漁史 〔寄書〕雨雪猥に開花を障る勿れ 江南橋史／交際の状況
 （続稿） 可愛楼晴雪
 5木〔寄書〕流行八人芸 鹿山人／＜昔時源家に大将と仰がれし＞ 横浜いせ山下の 高田しせ
 ん
 6金〔寄書〕鬼が島の銀行 東喜坊
 7土〔寄書〕当世人情噺第二 在長崎 初音谷稿／異銭疑問 麻布 梧面堂長柄
 8日〔雜譚〕お竹大日如来 銀西野史 〔寄書〕人の心情に立入る勿れ一 可愛楼晴雪／目的と
 方法の間違ひ 本田増次郎
 10火〔寄書〕春柳の記事 安井霞橋
 11水〔雜譚〕答異銭疑問 湊上漁史 〔寄書〕鬼が島銀行の続き 東喜坊／後へも気を配れ 横
 はまの しせん誌
 12木〔寄書〕月の弓張紙の由来第二 南新二／御仲間入のくさり 浜三 藍川翁
 13金〔寄書〕吝嗇者の失策話し 苔園逸心稿／人の心事に立入る勿れ二 可愛楼晴雪
 14土〔寄書〕人はかくこそ四 紙鳶絵師／＜一日谷中辺を通行せしに＞ 生のや鍋子
 15日〔寄書〕友人の一話を聴て師の言を述ぶ 不知廬舎
 17火〔寄書〕感心な老爺 本郷丸山 醒軒居士／＜はなせば飛ぶといつた古い洒落にもあらず＞
 まとき漫筆
 18水〔寄書〕北総小松君に謝す 二世 高島屋塘雨／人はかく社の五 下谷 紙鳶絵師 →新聞
 条例の改正、取り締まり強化対策として奥付署名者を1人にしほり「仮編集長兼印刷長
 小林金太郎」とする
 19木〔雜譚〕讒謗は己に利ならず 銀西野史 〔寄書〕＜賢くも我天皇陛下は＞ 向島 机友処
 士 →小林金太郎罰金80円。雜譚に「讒謗は己に利ならず」を掲げ、自由・改進黨・帝政
 各機関紙の記事がややもすれば中傷にわたることの不利を説く
 20金〔寄書〕住ば都 鹿山人
 21土〔寄書〕＜食へども其味ひを知らずと＞ 宮本町 松辺栄助／春遊余感 拈華微笑庵
 22日〔寄書〕人はかくこそ六 下谷 紙鳶絵師／懷を開くの説 四ツ谷 叢談会友 空々坊
 24火〔雜譚〕ひとし 湊上漁史 〔寄書〕二枚の舌 可愛楼晴雪
 25水〔寄書〕病牀の日記 あしかゞよし／屢居所を転ずるは貧乏の僻躰 半日庵芳律
 26木〔寄書〕山家のやどり 刈穂庵主／噫好時候だ 横浜 寛指堂主人
 27金〔寄書〕銀杏村に銀杏なき原由 安井霞橋／あきらめが肝腎 可愛楼晴雪
 28土〔寄書〕花中謾言一 向島 机友処士／ものは心もちしだい 生のや鍋子

読売新聞投書欄目録稿（明治16年）

29日〔雑譚〕時は万物の良医 饗庭篁村 〔寄書〕芽出し紅葉を見る 中坂まとき

明治16年（1883）5月

- 1火〔寄書〕花中謾言 向島 机友処士
- 2水〔寄書〕人さらひ 下谷 通新舎
- 3木〔寄書〕花中謾言三 向島 机友処士
- 4金〔寄書〕己に無して而して后人を非る 牛門外 赤松子
- 5土〔雑譚〕時は万物の良医（前号の続き） 饗庭篁村 〔寄書〕花のはなし 横浜の しせん
記／死灰再燃 可愛楼晴雪
- 6日〔寄書〕死灰再燃（続稿） 可愛楼晴雪
- 8火〔寄書〕月の弓張紙の由来第三回 南新二／散歩の余感 拈華微笑庵
- 9水〔雑譚〕春の暮 澤上漁史
- 10木〔寄書〕＜本年一月二日より東京府内郵便往復の方法を＞ 北甲賀町 鱸清輔／幽霊の変革
東喜坊
- 11金〔寄書〕楠木細工の感 在熱海 下総八日市場小松戯稿／針目途の小言 下谷の通新舎述
- 12土〔雑譚〕傍訓新聞の効用 銀西野史 〔寄書〕没書の説 本郷 柴江春 →雑譚「傍訓新聞
の効用」で、小新聞のわいせつ記事掲載を戒める
- 13日〔寄書〕嘆一嘆 左衛門河岸 素娥自然／目移の失策 生のや鍋子
- 15火〔寄書〕獅子王の剣 苔の屋逸心／初めて枕と語る 拈華微笑庵
- 16水〔寄書〕幽霊の変革前号の続き 東喜坊／師匠のおかげ 根岸の里 鈍我 →奥付署名を
「持主兼編集人居林誠孝、印刷人吉良義常」と改める
- 17木〔雑譚〕茶の湯 澤上漁史 〔寄書〕忠臣は白い顔佞人は赤い顔と善悪わからぬでもツた世
界 横はま 寛指堂 しせん稿／新陳代謝 中坂まとき
- 18金〔寄書〕他の三箇国は如何 可愛楼晴雪
- 19土〔寄書〕出世の稽古 鹿山人／獅子王古剣由来概畧 本郷一楽 →新聞条例改正で新設の保
証金制度により、新聞雑誌32紙が廃業と報道（うち2紙が続刊，5.23付で廃業29紙と報
ずる）
- 20日〔寄書〕嘆一嘆（前号の続） 素娥自然
- 22火〔寄書〕取合せの比喻 麻布 刈穂庵主
- 23水〔雑譚〕刀鎚の音 不知廼舎 〔寄書〕蘆の湯の由来 横浜廻 松月堂／＜光陰は矢よりも
早く＞ 海野ふかしき
- 24木〔寄書〕獅子王の剣由来続篇 江戸溪上古樵人
- 26土〔雑譚〕観音大士に問ふ 澤上漁史 〔寄書〕嘆一嘆する茲に三回 素娥自然
- 27日〔寄書〕謹而苔の屋大人に問ひ奉る 班文子
- 29火〔寄書〕稼で貧乏する 伊東橋塘／秋色桜の感 麻布 刈穂庵
- 30水〔雑譚〕拷問の演芸廃すべし 銀西野史
- 31木〔寄書〕女房の味 かな井安善／小説本を読むの得失 可愛楼晴雪

明治16年（1883）6月

宗 像 和 重

- 1 金〔寄書〕〈寒ければ寒すぎるとて〉 まとき漫筆／初めて枕と語る（前号の続） 拈華微笑庵
- 2 土〔寄書〕拷問の演芸廃すべからず 可愛楼晴雪
- 3 日〔雜譚〕黴毒可怖 饗庭篁村 〔寄書〕〈妾は学もなく才もなければ〉 賤女 松島廼晚鐘
／嘆一嘆のしばみ（否）四回目 素娥自然
- 5 火〔寄書〕小説本を読むの得失（続稿） 可愛楼晴雪
- 6 水〔寄書〕胃病患者諸君に告ぐ 早川四郎稿／世間の婦人方に告ぐ 拈華微笑庵
- 7 木〔雜譚〕観音大士の告 澤上漁史 〔寄書〕お祭りの弊 横浜 日下人
- 8 金〔寄書〕御油断めさるな 渡辺晴雪漫記／〈余は今川了俊の裔と云訳には非ざれども〉 小金井 久世仁述之
- 9 土〔雜譚〕黴毒可怖（前号の続き） 饗庭篁村 〔寄書〕五郎丸の評 麻布 刈穂庵
- 10 日〔寄書〕〈今年もだんだん虎列刺軍が〉 うし込 たまき生／小説本を読むの得失（続稿）
可愛楼晴雪
- 13 水〔雜譚〕真の英雄は人の己を誘るを憎まず 饗庭篁村 〔寄書〕嘆一嘆する五回 素娥自然
／小説本を読むの得失（完結） 可愛楼晴雪
- 14 木〔寄書〕水の用心さッしやりませう 横浜いせ山下の しせん／真直に慾をかわけ 向島
机友処士
- 15 金〔寄書〕寸法未分 在横港 安田米斎醉稿／〈貴社新聞第二千五百十一号〉 湯島 高瀬某
稿
- 16 土〔寄書〕画工のめざまし 下谷 鳳菴／教育博物館に遊ぶ 艸逢子
- 17 日〔寄書〕画工のめざまし（前号の続き） 下谷 鳳菴
- 19 火〔寄書〕真直に慾をかわけ（続き） 向島 机友処士
- 20 水〔寄書〕画工の目ざまし（大和絵） 鳳菴／もとの空阿彌 麻布 刈穂庵主
- 21 木〔雜譚〕新聞各社の為めに賀す 澤上漁史 →成島柳北、雜譚で「新聞取締りの強化は、新聞の勢力増大の証左」と言論圧迫に苦しむ同業各社を激励
- 22 金〔寄書〕素娥氏に答ふ 三番町 萩野穆／地方の医風に感あり 拈華微笑庵
- 23 土〔寄書〕月の弓張紙の由来（前号の続き） 南新二／〈日も西山に入相の〉 横はまの し
せん記
- 24 日〔寄書〕〈女はかみのめでたからんこそ〉 中坂のまとき／画工の目ざまし（画そらごと）
鳳菴
- 26 火〔寄書〕表面の体裁 可愛楼晴雪／〈此説恐らくは木に縁て魚を求むるの〉 艸逢子
- 27 水〔寄書〕月の弓張紙の由来（前号の続き） 南新二／気の用心さッしやりませう 北総八日
市 小松戯稿
- 28 木〔寄書〕時勢の変遷 可愛楼晴雪／亭主の味ひを聞く 横はまの しせん記
- 29 金〔雜譚〕第二回絵画共進会 銀西野史
- 30 土〔寄書〕自首 扶桑醉客稿／新説紫陽花物語 鹿山人

明治16年（1883）7月

- 1 日〔寄書〕〈エーと踵のあたりより〉 艸逢子

読売新聞投書欄目録稿（明治16年）

- 3 火〔雑譚〕紫陽花 澤上漁史
- 4 水〔寄書〕横浜の粹君子しせん先生に辞す かな井安善
- 5 木〔寄書〕地方の医風に感あり（前の続き） 拈華微笑庵極楽
- 6 金〔寄書〕新説紫陽花物語 鹿山人／＜余頃日友人藤田令仁氏を＞ 三田四国町 三鱗生＜＊
江藤新平の書を採録＞
- 7 土〔雑譚〕強情の失敗 饗庭篁村 〔寄書〕倭約と吾輩とは似て非なる者か 横はまの しせん稿
- 8 日〔寄書〕寡慾の人物 艸逢子／物もいひやう一 可愛楼晴雪
- 10 火〔寄書〕傍見の説 青山南二 東今一／画工のめざまし（大石真虎） 風庵
- 11 水〔雑譚〕学問は多書を要せず 銀西野史
- 12 木〔寄書〕物もいひやう二 可愛楼晴雪／＜三寸之春一夜之夢＞ 向島 机友処士
- 13 金〔寄書〕両英雄旧址の感 麻布 刈穂庵／地方の医風に感あり（前の続き） 拈華微笑庵
- 15 日〔寄書〕時勢の変遷二 可愛楼晴雪／軒の新竹 中坂まとき
- 17 火〔寄書〕真直ぐに慾をかかけ（続き） 向島 机友処士／画工のめざまし（北斎翁） 下谷 風庵
- 18 水〔雑譚〕筆とるも愛し 澤上漁史 〔寄書〕倭約と吾輩とは似て非なる者（前号の続き）
横はまの しせん稿
- 19 木〔寄書〕全国同胞諸君に忠告 神奈川県民 稲波西晴／氣の要心さッしやりませう（前号の
続き） 下総八日市 小松稿
- 20 金〔雑譚〕生物識の危害 不知廼舎
- 21 土〔寄書〕つくろはぬ物の名 中坂まとき
- 22 日〔寄書〕＜野史頃日長崎より＞ 静岡 初音谷梅州／巨勢金岡の名画 東喜坊
- 25 水〔寄書〕嫌で幸ひ好かれちや困る 横浜のしせん／読売雑譚を読 外神田 かな井安善
- 26 木〔寄書〕地方の医風に感あり（前の続き） 拈華微笑庵／夏夜見蝶有感新体詩一首＜＊詩＞
本所 犬山居士
- 27 金〔寄書〕坊の字 可愛楼晴雪／月の弓張紙の由来（前号の続き） 南新二
- 28 土〔雑譚〕謀叛人 銀西野史 〔寄書〕画工の目ざまし（猥りに人を誘ふべからず） 風庵
- 29 日〔雑譚〕時刻の不注意 澤上漁史 〔寄書〕巨勢金岡が名画のつゞき 東喜坊

明治16年（1883）8月

- 1 水〔寄書〕物もいひやう三 可愛楼晴雪／詩文章 神田錦町 閑人
- 2 木〔雑譚〕官報の影響 銀西野史 〔寄書〕また始まつた昼寝の小言か 横浜いせ山下の 寛
指堂しせん誌 →雑譚「官報の影響」で、官報発行一か月、新聞読者の減少なしと説明
- 3 金〔寄書〕＜世の諺に尽して其甲斐なきを＞ 鈍我／茲商人に告ぐ 太和田為太郎稿
- 4 土〔寄書〕何に付けても金の欲さよ 坂本村 杉田／借金は親の敵ほどに思へ 外神田 かな
井安善
- 5 日〔寄書〕昼寝の失敗 可月子／偶感 苔の屋一心
- 7 火〔寄書〕没書紀行 拈華微笑庵
- 8 水〔雑譚〕世界は我一代にて滅せず 饗庭篁村 〔寄書〕昼寝 向島 机友処士

宗 像 和 重

- 9 木〔寄書〕結婚忠告 尚新老人
 10 金〔雜譚〕小技にのみ耽る勿れ 澤上漁史
 11 土〔寄書〕人は気の持ち様 苔の屋一心／豆州網代浦の昔噺し 横はまの 寛指堂主人
 12 日〔寄書〕画工のめざまし（画工の目ざまし） 鳳菴／交易上の損益 神田錦町 閑人
 14 火〔寄書〕我身つねって人の痛さを知る 横はまの しせん病床に記す／町道場の制限を請ふ
 中坂まとき
 15 水〔雜譚〕隠居 銀西野史
 16 木〔寄書〕町村会寧ろ無益には有らざるなき乎 大和田為太郎稿／＜吾輩幼少の時＞ 林未得
 17 金〔寄書〕ハテ残念ぢや 可愛楼晴雪／＜中二階の縁前に＞ 横はまいせ山下の しせん述
 18 土〔寄書〕薬罐に汗をかゝせる伝 横浜の しせん述る／復讐無事に住吉（初冊） 東喜坊
 19 日〔寄書〕近所の噂 鹿山人／飢饉の夢 南新二
 21 火〔雜譚〕苦楽はさまざま 澤上漁史 〔寄書〕＜近来医術大いに開け＞ 二代目 高島屋塘
 雨
 22 水〔寄書〕御精霊様の不幸を憫む 北総小松稿
 23 木〔寄書〕＜左の一編は大日本私立衛生会に於て＞ 編者識＜＊三宅秀の演説筆記「夏時衛生
 法」を掲載＞／饑饉の夢（前号の続） 南新二
 24 金〔雜譚〕苦楽はさまざま（前号の続） 澤上漁史 〔寄書〕夏時衛生法（前号の続き）
 25 土〔寄書〕夏時衛生法（前号の続き）／修身学の仇を論ず 安井霞橋
 26 日〔寄書〕夏時衛生法（前号の続き）／物もいひやう四 可愛楼晴雪
 28 火〔寄書〕没書紀行（前号の続き） 拈華微笑庵
 29 水〔寄書〕望みある世中 中坂まとき生
 30 木〔雜譚〕秋の初風 饗庭篁村 〔寄書〕＜何と秀さん一雨慾いと云ふも＞ 売薬屋の隠居
 和胸散人
 31 金〔寄書〕腹中事件 向じまの ふせん誌／呆れて言ふ所を失なふ 青山南町 鶴の屋一声

明治16年（1883）9月

- 1 土〔寄書〕我が身体は食物より貴重なり 拈華微笑庵／自由自在 神田錦町 閑人
 2 日〔寄書〕好寸法 坂本町 和胸散人
 4 火〔寄書〕天命に従ひたまへ 蓬風子
 5 水〔寄書〕二十六夜の噺 横浜いせ山下の しせん／＜昔楚国に一人の夫あり＞ 鶴の屋一声
 6 木〔寄書〕初秋の感懷 可愛楼晴雪／真宗は開化宗か 坂本町 和胸散人
 8 土〔雜譚〕妄りに信ずる勿れ 澤上漁史 〔寄書〕銭の無き愛国者必の字に驚く 拈華微笑庵
 9 日〔寄書〕木ッ葉の火 横浜 寛指堂しせん／飛だ叢談 安井霞橋
 11 火〔寄書〕＜昔し唐に韓退之とかいへる儒生あり＞ 蓬風子／投書の功能 可愛楼晴雪
 12 水〔寄書〕＜蕪裏亭の豆粥も＞ 向島 机友処士／苦勞を畏るゝ莫れ 神田錦町 閑人
 13 木〔寄書〕河童の尻 蓬風道人／異人 青山南二 鶴の屋一声
 14 金〔寄書〕日本西洋諺言比較 捕鯨生
 15 土〔雜譚〕うき世の中 澤上漁史 〔寄書〕復讐無事に住吉（二冊目） 東喜坊
 16 日〔寄書〕＜本月五日刊行の医事新聞＞ 大日本私立衛生会員 在武州八王子十日市場 竹内

読売新聞投書欄目録稿（明治16年）

仙祐／片口 可愛楼晴雪

18火〔寄書〕常の楽み 蓬風道人／手遅れ 鹿山人

19水〔寄書〕心の盗人 常磐町 きせん誌

20木〔雑譚〕精進の説 銀西野史

21金〔寄書〕化物は三文の直段なきか 中坂まとき草／片口（続稿） 可愛楼晴雪

22土〔寄書〕＜本月六日出帆札幌行きの官船へ＞ 四谷情老 門脇五連／復讐無事に住吉（三冊目） 東喜坊

25火〔雑譚〕葡萄園に遊ぶ 寢庭篁村

26水〔寄書〕番傘の紛失 横浜いせ山下の天保銭五枚／冬の寒風 外神田 かな井安善

27木〔寄書〕人間万事女郎屋の馬 可愛楼晴雪／揺銭樹 青山南二 鶴の屋一声

28金〔雑譚〕物静か 澤上漁史 〔寄書〕己を愛せよ 神田錦町 閑人

30日〔寄書〕病床手記 可愛楼晴雪／復讐無事に住吉（四冊目） 東喜坊

明治16年（1883）10月

2火〔寄書〕粹は教の堅固を破る 根岸の里 鈍我／人の気もしらないで 横浜 寛指堂主人

3水〔寄書〕かなのべんりなるろん 四番町 買水軒主人

5金〔寄書〕外何人 可愛楼晴雪

6土〔雑譚〕芸者の風俗 銀西野史 〔寄書〕＜去八月一ヶ月東京府下に於て＞ 外神田 かな井安善

7日〔寄書〕机上掃塵漫筆一 渡辺晴雪

9火〔寄書〕口の説 下谷の 通新舎／かなのくわいのはなし そうどくせんもんいし たちばな

10水〔寄書〕晴雪君に質す 入谷村 杉田生

11木〔寄書〕鏡の説 秋虎太郎稿／晴雪子に質す（前号の続き） 杉田生

12金〔寄書〕かなのくわいのよろこび 神田錦町 市隠翁／＜私儀先年来日々読売新聞を＞ 考手五郎次郎

13土〔雑譚〕崑崙の数 澤上漁史 〔寄書〕かなのくわいといふことをくはだてたまふとききてく ＊一首＞ ちとら／外何人其二 可愛楼晴雪

14日〔寄書〕翻訳家諸先生に要請す 拈華微笑庵／昔物語 秋虎太郎稿

16火〔寄書〕酔客の風俗 可愛楼晴雪／＜ふるきふみに、御てうど共も＞ 胡麻菓子売の翁

18木〔寄書〕病余弄筆 中坂まとき／復讐無事に住吉（五冊目） 東喜坊

20土〔寄書〕負惜み 風灰子

21日〔寄書〕人間世界 根岸の里 鈍我／袖時計は懷裏に藏せよ 枕水漁史

23火〔寄書〕妾もおきやう 下谷の通新舎／うきよは花の如し 藪下 秋虎太郎稿

24水〔寄書〕＜むかし鳥捕部万が犬は＞ 上野人 狩野利房／贅説 京橋 尻学齋

25木〔寄書〕物の嫌ひなのを芸とす 南新二

26金〔寄書〕馬鹿病人の馬鹿投書 拈華微笑庵／筆を提げて壇に登る 四山野史

27土〔雑譚〕臭き国風 澤上漁史

28日〔寄書〕写真はどうつす人の随意かうつして貰ふ人の随意か 横はまの しせん誌

宗 像 和 重

〔附録〕日食論 地理局員 杉山正治

30火〔寄書〕復讐無事に住吉（六冊目） 東喜坊

31水〔雑譚〕日本商人共進会 銀西野史 〔寄書〕職分をつくせ 神田錦町 閑人

明治16年（1883）11月

1木〔寄書〕＜左の一篇は本月二十七日大日本私立衛生会に於て＞ 築地 杏夢楼主人＜＊海軍
軍医千葉吾一の演説筆記＞

2金〔寄書〕千葉吾一君の演説前号の続き

4日〔寄書〕謡曲日比谷 胡麻菓子好の翁／嘶しの音頭とり 横はまの しせん戯記

6火〔寄書〕謡曲日比谷のつゞき 胡麻菓子好の翁

7水〔寄書〕稗史小説の害 枕水漁史／フハク会 根岸の里 鈍我

8木〔寄書〕貴社式千六百三十三号の投書を読 大坂 斧僊居士

9金〔寄書〕軍談師先生に望む 向島 机友処士／眼の御注意 横浜 寛指堂しせん記

10土〔寄書〕養気園の記 可愛楼晴雪／＜此程貴社のと書いては＞ 外神田 かな井安善

11日〔雑譚〕意外の至り 湍上漁史 〔寄書〕浮世眼鏡の抜書 藪下 柳塘

13火〔寄書〕謡曲日比谷の続き 胡麻菓子好の翁／ヲヤそろそろはじまつたよ 横浜いせ山下の
馬鹿おやち天保五枚の老人

14水〔寄書〕謡曲日比谷の続き 胡麻菓子好の翁／寝言の掃除 四山野史

15木〔寄書〕謡曲日比谷のつゞき 胡麻菓子好の翁

17土〔附録〕三人職工 胡麻菓子好の翁

18日〔寄書〕狂言三人職工のつゞき 胡麻菓子好の翁

20火〔寄書〕狂言又平 胡麻菓子好の翁／外何人の寝言 養気園晴雪

21水〔寄書〕狂言又平昨日の続き 胡麻菓子好の翁

22木〔寄書〕腋臭を患ふる人に告ぐ 根岸 杉崎迂夫／思寝の夢 向島 机友処士

24土〔寄書〕傷の付いた古ぎせる 横はまの しせん誌／鼻下長先生に忠告す 麻布 刈穂庵稿

25日〔寄書〕暗に人を批評する勿れ 藪下 柳塘居士／議會傍聴の余感 枕水漁史

27火〔雑譚〕音無川 湍上漁史 〔寄書〕机上掃塵漫筆二 可愛楼晴雪／世に処する法 横はま
日下人

28水〔寄書〕＜昔或国のかたはらに＞ 縁の下谷の力餅屋の主／歎息の記 藪下 柳塘居士

29木〔寄書〕もぎ木のはなし 樵耕亭蛙船／油断大敵 四山野史 →山田美妙（樵耕亭蛙船）が
寄書欄に初投稿

30金〔寄書〕復讐無事に住吉（七冊目） 東喜坊

明治16年（1883）12月

1土〔寄書〕思寝の夢（前号の続） 向島 机友処士 〔附録〕蠅は伝染病の媒介をなすものな
り ＜＊北里柴三郎演説筆記＞

2日〔寄書〕頑固の御手本 枕水漁史稿／思寝の夢（前号の続） 向島 机友処士

4火〔寄書〕庭の山茶花 横はまいせ山下の しせん記／もぎ木のはなし続稿

5水〔寄書〕耐忍とは愛ちや 可愛楼晴雪／田舎土産 拈華微笑庵主人 〔附録〕孕不孕は子宮

読売新聞投書欄目録稿（明治16年）

の異常に在り 赤坂 伊東誠之述

6木〔雑譚〕卑屈の誤認 湊上漁史 〔寄書〕底の説 柳塘居士／耳と目の戒め 赤坂 橋本じゅん女

7金〔寄書〕早婚の弊上 可愛楼晴雪／果を見て因を知れ 東園居士

8土〔寄書〕こよみうり 横はまいせ山下 寛指堂 子仙述／早婚の弊下 可愛楼晴雪

9日〔寄書〕滝の川に紅葉を賞す 蓬風道人／＜此頃は打絶て競べ物や見立物は＞ 神奈川寓 鈴木生

11火〔寄書〕＜やまとうたは、ひとのこゝろを＞ きにつうさやすら／もぎ木のはなし続稿 樵耕亭蛙船艸

12水〔寄書〕自愛説 横はま 日下人

13木〔寄書〕局外居士の文を読 四番町 傍觀亭主人／漫言 麻布 刈穂庵

14金〔寄書〕歳晩の嘆 向島 机友処士／投書の種 可愛楼晴雪

15土〔寄書〕野路のすさみ 麻布 刈穂庵／慾を解く 下谷 年田生

16日〔寄書〕歳晩の辞 可愛楼晴雪

18火〔寄書〕迂闊 可月子／嘘の説 藪下 柳塘居士

19水〔寄書〕日本の文学 横はま 日下人

20木〔寄書〕＜朝夕のけふり立かねたる＞ 千称のあるじ百名／＜小生あるとき、友人に誘はれ＞宇治 菟陽逸士稿

21金〔雑譚〕神の賜もの 湊上漁史 〔寄書〕貝覆の説 安井霞橋／虚名を売る伝授 碌々山人

23日〔寄書〕煤掃の寝言 相鼠園主人稿／土井侯の逸事 香堂居士

25火〔寄書〕中坂まとき君を悼む 可愛楼晴雪／＜中坂真とき氏の＞ かな井雄徳＜＊二首＞／上総東命町大火の詳細 北総八日市場小松 ＊投書家中坂まとき（中川真節）は21日に死去

26水〔寄書〕鶴の御歌題 麻布 刈穂庵

27木〔寄書〕復讐無事に住吉（八冊目） 東喜坊

28金〔寄書〕＜過し日友達のうち寄りて＞ 琴通舎 八洲楽＜＊岩上亭・千種庵・坂本額翁・桃の家・春の屋秋雄・有山亭紅楓・萩園秋楽・秋本月丸・一絃舎寸万琴・亀の舎池住・竹井幸子・井池みち子・松本芳延・八洲楽の「かなのくわいといふ事を題に詠み出たるえせ歌」各一首を採録＞／＜中川まとき君を悼む詞は＞ 前島和橋＜＊一句＞・下総小松＜＊一首＞／中坂まとき大人の死を悲しむ 拈華微笑庵／＜貴社第二千六百六十八号＞ 雉子町 徳隣

29土〔寄書〕義之の千字文 苔の屋一心

* 本稿は、平成三年度文部省科学研究助成費、および工学院大学学園研究奨励金による「明治期新聞投書欄の研究」の一環としてまとめたものであり、続稿の予定がある。

（むなかた かずしげ 本学助教授 文学）